

Title	批判的景気観測に就ての若干の考察
Sub Title	
Author	小高, 泰雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1934
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.28, No.5 (1934. 5) ,p.611(27)- 643(59)
JaLC DOI	10.14991/001.19340501-0027
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19340501-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批判的景氣觀測に就ての若干の考察

小 高 泰 雄

一、景氣理論と景氣觀測法

二、景氣觀測の基礎としての徵候論の批評

三、批判的資料集成

四、結 論

本論に入るに先立つて、景氣觀測の意義に就て、若干の考察をして置きたいと考へる。こゝに景氣觀測といふは、國民經濟全般の立場から、經濟生活に現はるゝ短期變動様相を分析し、其の發展を豫測しやうとする試である。註一) 斯様な國民經濟的立場からする觀測に對して、私經濟的立場からする觀測は區別して考らるべきであらう。後者は主として特殊貨物の販路分析或は投資觀測を主要なる内容としてゐる。資本主義社會は本質的に豫測生産の社會であるからして、國民經濟的立場からの觀測が行はるゝ以前に既に早く各種生産者によつて、多かれ少かれ合理的な私的觀測が行はれてゐたと考へ得る。而して、生産力の發展による生産規模の擴大は漸次に生産流通の局面の統制、組織化を齎すに至つたことは明ではあるが、然も、それにもかゝらず、觀測の範圍は愈々擴大し、其の内容は

批判的景氣觀測に就ての若干の考察

愈、多岐化してゐる。今日に於ては、企業家、銀行家、投資顧問其他が各、特殊の調査課乃至は研究所を投げて、觀測の問題を重視し來つたことは明である。而して、大産業會社や金融業者の觀測業務の内容が廣汎となるに連れて、それ等が國民經濟的立場からする觀測と可成に接近し來つたことは看過し得ない所である。この事實は結局する所、企業の對象となる市場範圍の擴大化に歸せらるべきである。されば、觀測が如何なる性質のものかは、經濟學者統計學者がこれを研究すると、事業家がこれを研究することによつて區別せらるべきではなくして、觀察内容の如何によつてのみ區別せらるゝに至る傾向を示してゐる。

而して、私經濟的觀測と國民經濟的觀測は密接なる關係を持つてはゐるが、其の相異を概説すれば次の様である。私經濟的觀測は國民經濟的觀測に對して重要な調査目標の一をなしてゐるが、前者は愈、益後者を基礎として觀測しやうとしてゐる。換言すれば、觀察素材の點よりすれば、前者は後者の整序原理を通して構成せられる全要素中の一分子をなしてゐるに反し、後者は前者に觀測の理論的根柢としての基本的素材を提供してゐる。更に又觀測範圍よりすれば、後者の一般的なるに比して前者の特殊的應用的なるは明である。一層根本的なるは、私經濟的觀測が、特殊事業の收利性を主眼とする營利觀測であるに對して、國民經濟的觀測は、變動理論を根據とする純然たる客觀的な分析及推論に屬してゐることである。(註二)

さて本論で先づ問題としやうとするのは、この最後の點即ち觀測と景氣變動理論との關係である。

前述したやうに、景氣觀測は國民經濟生活の短期變動様相を全般的に觀測するのであるからして、同じく、國民經濟全體の立場から經濟生活の短期波動を理論付けやうとする景氣變動理論と密接に關係してゐることはいふ迄もない。而して景氣理論研究の目的が現實の景氣變動の説明に置かれてゐる以上(註三)この目的に添はない變動論は、

理論的に無價値であらう。この點を究極に迄押し進めるならば、景氣變動理論そのものゝ中に觀測理論が包攝せられてゐるかに見へる。かゝる立場からすれば觀測は觀測として理論的に獨立の地位を持つてはゐない。従つて、變動理論の行詰りそのことによつて觀測理論の行詰りが説明せられ得る。そして、理論的演繹的な觀測原理は、統計的歸納的な觀測原理とは對立することゝなる。かゝる議論は單なる抽象的な性質のものではなくして、觀測と理論の歴史的發展に於ける關係を説明する上に重要な意義を持つものである。十九世紀末葉より既に現はれてゐた統計的觀測法は歐洲大戰以後米國に於けるその發展を契機として、著しい進歩を示した。この事實は、かゝる立場からすれば當時迄に發展し來つた、幾多の恐慌理論或は景氣變動理論の現實的不妥當に對する、或は政策上の行詰りに對する反對物として發展し來つたものとして説明せられ得やう。而してこの立場は、一見妥當のやうに考へられてゐる。そこでかゝる説明が妥當であるか否かを吟味することは自から觀測と景氣變動理論との關係を明かにすることゝなると考へるのである。

そこで以下に考察しやうとする論點は次の様に分類せられる。第一に景氣變動理論構成の方法は如何なるものか第二、それが内容論的に行詰つたのは如何なる點に存するか。第三、景氣論の方法論よりして、觀測原理の獨立性が、認められ得るか、第四、若し認めらるゝとせば、兩者の關係如何である。

先づ第一に景氣變動理論の研究方法の一般的特徴に就て關説しやう。總ての景氣論は次の様な構成を持つてゐることは否定し得ない。即ち資本主義社會に於ける均衡状態を前提とし、斯る均衡を破壊する原因を抽象し、進んで恐慌或は波動運動を理論付けやうとすることである。

かゝる均衡状態の意味する所は論者によつて、種々異つてゐるのは云ふ迄もない。正統派經濟學說殊にセイの市場理論に

現はれたる調和的恐慌理論は明にかゝる均衡的狀態を以つて、現實的或は現實可能なるものとしてゐる。シスモンディに於いて消費を中心とする均衡を中とする均衡概念も亦其の「自然状態」よりの影響のもとに立つものであつた。マルクスは生産部内間の均衡、生産消費間の均衡を恐慌現實の具體的條件となしてはゐるが、それは、自然状態に於ける或は社會的生產一般に於いて考へられる抽象的均衡状態ではなくして、資本主義社會を前提とする特殊の均衡状態に外ならぬ。ツガン・パラボツスキーは正統派的或は靜態的均衡状態にして、マルクスの表式的分析に於ける均衡概念を誘導し、所謂、動態的均衡状態より出發するものである。ツガンの流を汲むスピートホフに於いても中間消費財と營利資本との間に於ける均衡が基底となつてゐる。シュンペーターに於いては、靜態と動態とは對立し、而も、靜態は現實的過程に於ける均衡状態であると考へられてゐる。レーデラーも亦セイの如き經濟社會の均衡關係の分析を試みて景氣變動に關する理論的體系を誘導してゐる。カッセルの變動理論が價格の均衡理論を分析の第一歩としてゐることはよく知られてゐる所である。更に又貨幣的景氣理論に對するヴィクセル、フィッシャー、ミロゼス、ハイエク等一連の經濟學者の變動理論を見渡しても、こゝに物價と貨幣との均衡關係が其の一般的基底をしてゐることは明なことであらうと思はれる。

斯様な均衡を以つて、これを現實上の可能性のあるものとして取扱ふか、乃至は、現實が不斷にこれに向つて接近しやうとする靜態即ちクライクが云ふ所の究意概念として取入れるか或は單なる抽象的理論的前提として考へるかによつて、理論全體が著しい相異を示し來ることはいふ迄もない所であらう。然し乍ら從來の主要なる變動理論が孰れも均衡状態或は均衡條件を以つて理論構成の出發點としてゐることは否定し難い所であり、且つ、かゝる一般的均衡状態は理論上假想せられる觀念的狀態であることは明かである。斯様な、觀念的狀態を前提とすることによつてのみ、初めて、現實的變動の理論的構成が可能となつてゐる。蓋し、變動一般は、均衡の破壊によつてのみ生じ、従つて、運動は均衡との關係なくしては、其の理論的構成を否定せられるからである。擬斯様に觀念せられ

た均衡に立脚して、構成せられんとする變動理論は如何なる性質かといふに、從來の景氣理論の行き方は孰れも、これを以つて、純粹理論的構成のものとしてゐる。即ち景氣變動の原因を、生産と消費間の不均衡に求めるにせよ、生産部門間の不均衡或は兩者の綜合に求めるにせよ、更に又貨幣的要因に求めるにせよ、純粹理論的構成であることに於いて變りはない。換言すれば、資本主義經濟に現はれたる變動の諸形態を分析し、其の中、景氣變動現象と考へられるものを抽出し、其の典型的或は理論的姿態を基底としてゐる。斯様な典型的景氣運動の描出は景氣定型的學の發達と共に愈精緻を加ふるに至つた。景氣變動論殊に所謂景氣循環論は、過去に於いて起り來れる諸變動原因中最も多く起り來れる原因を把握して、均衡との關係を理論付けるものに外ならぬ。従つて、それは均衡状態が、觀念的存在であつたと同様に、觀念的であり、限界概念たるに外ならぬ。茲に理論付けられる變動は現實の經濟に於ける具體的變動そのものではなくして一定の構想せられた經濟の中に包まるゝところの變動である。均衡と變動とは同じく觀念的なものとして取扱はれるとしても、抽象の手續とか或は現實からの選擇の指針等に就いて著しく趣を異にしてゐるものがある。均衡は現實の經濟社會に於いて一般化せられてゐる與件を獲得することが容易であるに對して、變動理論に於いては、かゝる與件の獲得は、事情の複雑なるが故に、自ら複雑なる手續をとる統計的或は歸納的方法のとられるのが普通である。併し、それによつても兩者が孰れも觀念的存在であり限界概念である點に變りはない。最近に於ける景氣理論の研究が示してゐる恐慌論的研究と、長期波動的の研究の孰れに於ても、それ等が、理論的構成の完全さを得るが爲めには、典型的或は觀念的變動の姿態を對象とせざるを得ないであらう。擬景氣變動理論を構成する目的は現實の景氣變動を説明することに存することは疑ひ得ない所である。所でかゝる目的を最もよく満し得るが爲めには、第一には、過去に於いて生起した諸原因中最も多く起り來つた與件の選擇が

重要となり來るとともに、第二には、假定せられる均衡を一層現實的事情と一致せしめるやうな條件を與ふることが必要であらう。

以上概観した所は景氣理論研究上に於ける一般的方法であるやうに考へられる。かゝる方法論に就いては、これを一般的に見ると、矛盾は考へられぬ。蓋し、景氣理論が特殊景氣變動の理論付けにあらずして、景氣變動一般にかゝる以上、現實社會の均衡條件を抽象して、その上に、一般的原因を働かしめて、典型的變動を導き來ることは不可避的であるからである。

以上に於て景氣變動理論の方法論を説明したからして、次に然らば、諸景氣變動理論が歐洲大戰以後、更に一層適切には、今次の世界恐慌に際して孰れも其の現實的妥當性を喪失するに至つたのは如何なる理由に基くか。それは以述したる如き方法論上の缺陷に歸因するものではなくして、それ等の諸理論が理論の構成に際して資本主義社會の發展理論を適當に商量してゐない點に歸せられやう。一層具體的にいふなれば、一般均衡理論の設定に於いて、最近の獨占資本の發展と適當なる關聯を保たしむることなく、依然として自由主義的機構を以つて満足してゐたが故である。即ち多くの理論家は、普通獨占資本或は帝國主義の表現をとる所の諸活動の結果たる市場關係の變化を以つて、單に一時的經過的或は、特殊的變化と見做して、これを永久的構造的變化として取扱はなかつたことが最も根本的な缺陷ではなかつたかと考へられる。然し、それは基より方法論上の缺陷ではないであらう。

扱、斯様な研究方法に立脚する景氣理論が景氣観測に對して如何なる關係に立つかが次の問題である。景氣観測は前述したやうに、景氣の現段階の把持と、其の景氣的發展様相の豫想である。故に、茲に問題となるのは現實の變動それ自體である。然るに、景氣理論がその儘の形を以つてしては、それが、現實に適應せられる上に、一定の

りとせば、リキニウス法が公地の賃借權を限定せりと做す傳説的記事は誤れるものと認むるを得ず。(Frank, op. cit., pp. 48-9.)

然れども、是れ等の法律的規定は幾許もなくして廢弛し、是れに由つて革除せんことを期せられたる弊害は以前よりも更らに不良なる形態に於いて再現し來れり。伊太利亞が歩一步と征服せらるゝに連れて、富者は愈々多くの公地を占有し、而して法は單に其の使用のみを彼れ等に許容せるに過ぎざることを忘却して、之れを以つて彼れ等の永續的財産と看做すに至れり。

六

貴族と平民とは是れ迄大體に於いて二個の對抗的黨派を形成せり。リキニウス法の通過後、直ちに這般の決定的行動によつて生ぜしめられたる新たな政治的狀態の結果として、兩黨共に分裂を生ずるに至れり。既述せるリキニウス法中に包括せられたる諸規定は明かに二種の相異なる要素を具有するものなり。一は「舊家」に對する「成金」の鬭争を表すものにして、他は富者に對する貧者の鬭争を示すものなり。貴族黨中の右翼は自黨が平民に對して行へる讓歩を快しとせず、機會ある毎に舊態を回復せんとしつゝあるに反し、其の左翼は衷心よりして時局を承認し、進んで平民黨中の更らに富裕にして更らに保守的なる部分と行動を共にせんとするの概を示せり。平民黨中の右翼若しくは富者は今や彼れ等が贏ち得たる政治的平等、官職に就くの資格を以つて悉く満足し、更らに是れ以上は何物をも要求せざる者なるに反し、左翼若しくは貧民は政治的平等の略取を以つて更らに其れ以上の發展の前

重要となり來るとともに、第二には、假定せられる均衡を一層現實的事情と一致せしめるやうな條件を與ふることが必要であらう。

以上概観した所は景氣理論研究上に於ける一般的方法であるやうに考へられる。かゝる方法論に就いては、これを一般的に見ると、矛盾は考へられぬ。蓋し、景氣理論が特殊景氣變動の理論付けにあらすして、景氣變動一般にかゝる以上、現實社會の均衡條件を抽象して、その上に、一般的原因を働かしめて、典型的變動を導き來ることは不可避的であるからである。

以上に於て景氣變動理論の方法論を説明したからして、次に然らば、諸景氣變動理論が歐洲大戰以後、更に一層適切には、今次の世界恐慌に際して孰れも其の現實的妥當性を喪失するに至つたのは如何なる理由に基くか。それは以述したる如き方法論上の缺陷に歸因するものではなくして、それ等の諸理論が理論の構成に際して資本主義社會の發展理論を適當に商量してゐない點に歸せられやう。一層具體的にいふなれば、一般均衡理論の設定に於いて、最近の獨占資本の發展と適當なる關聯を保たしむることなく、依然として自由主義的機構を以つて満足してゐたが故である。即ち多くの理論家は、普通獨占資本或は帝國主義の表現をとる所の諸活動の結果たる市場關係の變化を以つて、單に一時的經過的或は、特殊的变化と見做して、これを永久的構造的變化として取扱はなかつたことが最も根本的な缺陷ではなかつたかと考へられる。然し、それは基より方法論上の缺陷ではないであらう。

扱、斯様な研究方法に立脚する景氣理論が景氣觀測に對して如何なる關係に立つかが次の問題である。景氣觀測は前述したやうに、景氣の現段階の把持と、其の景氣的發展様相の豫想である。故に、茲に問題となるのは現實の變動を自ら體である。然るに、景氣理論がその儘の形を以つてしては、それが、現實に適應せられる上に、一定の

限界の存することは容易に想到せられる。蓋し、後者には、一切の偶然的繼起の要因は除去せられ、典型的景氣姿態が取扱はれてゐるが故である。然し、現實の經濟社會に作用してゐる景氣變動原因は、所謂從來の景氣變動理論に於いて、重視せられ考へられてゐた變動原因と同じきものでないことは明である。前述のやうにこれ等の變動理論が問題とした所は、發生蓋然性の最も大なる要素の變動を他の要素の一定の或は典型的變動に於いてのみ考慮し、これを必然的に發展せしめてゐるのである。然るに今や觀測は特殊原因の作用を、他の要素の特殊の發展のもとに考察しやうとしてゐるのである。もつとも、景氣變動理論が、これ等特殊の要素の變動更に、他の要素との關聯に就いて、重要な暗示を提供してゐることは否定しない。宛も動態經濟の基底が靜態經濟に存する如く、現實の包含する特殊要因が、如何なる傾向を以つて、發展し行かんとするかの問題は變動の限界概念を構成してゐる景氣理論に依據する所大なるはいふを待たぬ所である。然し乍ら、景氣變動理論が觀測に對して與ふる所は、斯様な觀念的出發に對する條件となるものではあるが、景氣觀測がこれによつて、其の全部の觀測機構を構成すべきものではない。景氣觀測は、變動原理とは別の觀測原理を持ち、而して、其のもとに於いて特殊の觀測方法が構成せられねばならぬ。景氣變動理論の價值喪失を實際的適應の不可能といふ事實關係から、乃至は、景氣政策としてのその失敗の事實から直接に締結しやうとする考察は、結局、變動理論そのもの、理論的性質を前述の様に解釋することによつて、解消せられると考へられる。更に又、これが爲めに練達なる事實上の觀測家が、往々にして、靜態的理論或は均齊的發展に對する景氣理論上の考察を蔑視する如きは、孰れも敘上の景氣理論と觀測との區別を理解しないか或は景氣理論の性質を理解しないが故である。レイ・ヴァンズが觀測者は、第一に理論家であり、次で統計家たることを要すると述べたのはこの意味であらう。(註四)

以上の様な考察からすると、景氣理論の反動として機械的或はバロメーター式觀測の勃興し來つたことは、結局、景氣理論研究法そのもの、行詰りの結果たることを意味するものではなくして、其の現實への適應過程に於ける準備工作を閑却した點に歸せられるやうである。而して、景氣論が内容論的に行詰つたといふことは、新なる景氣理論構成への要求を喚び起すけれども、そのこと自體から必然的に觀測を主眼とする統計的研究の勃興を見た譯ではないであらう。統計的觀測の研究は、景氣理論そのものが、觀測とは別個の原理に立ち、従つて、現實の變動と將來への見透しに對しては全然別個の原理を要求することから起り來つた一の試みであると考へられる。然し、統計的或は機械的觀測法が、歐洲大戰以後十分なる正確さを以つて、觀測をなし得なくなるに至つたことは、疑ひ得ない所である、觀測が單に過去に於いて現はれたる經濟諸要素間の相關々係から將來を卜知しやうとする機械的方法に對して、景氣理論をこれに適用しやうとする試みもまだ十分なる効果を發揮してはゐない。(註五)そして現今に於いては觀測上の諸問題が個人的な洞察力に著しく左右せられてゐることを否定し得ないのである。觀測の理論は、觀測の方法が、其の本質をなしてゐる。其の方法が立脚する所の發展理論或は景氣理論は勿論觀測に對して重要であるとはいへ、それ等は、夫れぞれの部門に於いて、分野に於いて考究せられてゐるのであつて、現實的事情への理論の適合、且つ、實際に於いて經濟生活が示そうとする現象の把持は、觀測の如何によつて、其の正鵠なるか否かが決定せられるやうである。

以上に於いて、景氣觀測法が、景氣理論の研究方法とは本質的に異り、従つて、後者の内容論的行詰りは、觀測の結果に對して著しく重要な影響を與ふるけれども、然も、そは、觀測法そのものに對しては何等影響する所はないと考へられる。

註一 Wagmann: Konjunkturlehre 邦譯二六四頁參照。

註二 ワーゲマンは次の様に述べてゐる。「國民經濟上の豫測も企業家の計畫準備と同一の肉と血をもつ。唯相異なる一點は、前者が科學的概念的並に事實決定の普遍性正確性を利用する所に存する」と。(Ibid. 二六五頁)

註三 高田博士「經濟學新講」第四卷「變動の理論」第四章參照。

註四 尙この點に就して B. M. Anderson: Satic Economics and Business Forecasting, Economic essays contributed in honor of J. B. Clark. (Co-authorship of Slegman, Ely, Anderson and others).

註五 拙稿「景氣觀測に於ける理論と統計の折衷的傾向」三田學會雜誌三七・六・參照。

二

次に我々が取扱ふことを要するのは徵候論或は定型論と觀測との關係である。こゝに徵候論とS₁と(Symptomatik)は、ワーゲマンに従つて次の様に解して置かう。「徵候論は、事實の確認(經驗)の上に樹てられる。私が徵候論と言ふのは、現象の蓋然性法則を明かにする爲めの歸納的處理法のことである。従つて徵候論は純粹の事實確認以上には出ないが、まだ特定關聯の必然性についての理論にまで高められてはゐない。徵候論は景氣論の領域ではたゞ諸變動要素の蓋然的結合(Stochastische Verbundenheit)の認識を行ふに過ぎない。だから一定の諸現象が或る蓋然性をもつて同時に或は相繼いで現はれるとS₁を認識を以つて満足するのである。」(註二)而して、景氣論上に於ける徵候論の意義は、それが景氣觀測に對して持つ重要性に存する。宛も醫師が病源の不知なる場合にも病狀の個々の徵候を確めて、それより過去の經驗と類推によつてその疾病の今後の経過を判断する如きである。景氣論に於いて徵候論を用ふるのは丁度これと同様である。即ち變動様相即ち變動の容貌を把持してこれから將來の發展に就いての結

論を導くのである。

註 高田博士によれば、景氣微候論は、景氣運動に於ける各部分的變動の相互關係を明にすることである。他面、景氣段階の繼起の知識をも包含するけれども、これはさして重要ではない。而して前者即ち各部分的變動間の相互依存關係は、あくまでこれを事實の平面の上に於て明かにすることである。換言すれば、その運動の「推量的又は蓋然的結合」を明にするにある。即ちかゝる要素間に就いての因果關係の認識は、景氣理論上の問題であつて、こゝにいふ所の蓋然的結合は、AとBとの間の共存又は繼起の蓋然的なる關係である。換言すれば景氣變動に於ける相關々係の認識に外ならぬ。而して、微候論はそれが、景氣變動の事實的經過の概括的考察であるかぎり、一々の社會の具體的なる景氣狀態の觀測又は豫測の前提となり基礎的知識となるものである。即ち景氣觀測又は豫測はたゞ景氣微候論の知識に基てのみ行はれる。(註二)經濟學新講、第四卷變動の理論二二四—二三〇頁傍點は筆者)

景氣微候論の目的は前述のやうに、諸變動要素の蓋然的結合であるが、それが、將來の景氣變動の推測への基柢として利用せられるが爲めには、何等かの統一を持つ組織體として、構成せられてゐる。かゝる組織體を景氣の定型と呼び得るであらう。更に又、景氣微候を尤も敏感に正確に表示する變動要素を適當に配合し、一定の結合をなさしめるとき、それを經濟バロメーターと呼ぶ。(註三) 景氣定型とバロメーターとは往々にして混同せられるか、乃至は明確に區別せられないけれども、兩者は判然區別せらるべきであると思ふ。即ち前者は、景氣變動を表明する各種變動要素の典型的變動形體或は他の要素との典型的相關々係の綜合であつて、後者は、最も微候的且つ全般的に景氣を表明する代表的要素の結合である。故に、バロメーターは定型の一部を構成するに外ならぬ。而して、兩者に共通する所ものは、孰れも統計的基礎に立つことである。或は更に景氣の統計的歸納的研究の發展の結果初めて完成せられたと、述べる事が出来やう。

擬 我々は先づ景氣定型に就いて考へて見やう。勿論この場合は、景氣觀測或は豫測の立場から考慮するに外ならぬ。惟ふに景氣定型を構成する要素の分類はこれを種々に別ち得やう。ワグマンはこれを(一)數量(二)價額(三)取引に分類し、數量は、注文高、労働市場就業度、生産、消費、交通、價額は物價、賃銀、株價、金利、取引は、所得、貨幣流通手形交換等に細分類してゐる。又ミツチェルに於ては、事業の貨幣數量、貿易及生産の物理數量、一般事業狀態指數に分類してゐる。(註四) 而して、こゝに表はるゝ變動要素間の相關々係は、平均的或は典型的相關々係であることはいふをまたぬ所である。然るかぎり、變動の限界概念或は典型的景氣運動を問題としやうとする景氣論の對象として寄與する所大なるは云ふを待たない。然し乍ら、これが他面に於いて、「具體的なる景氣觀測の前提となり基礎的智識となり」得るとすることは無條件に容認せらるべきであらうか。

前段引用したワグマンの所説で解るやうに、疾病に對して其の經過の豫測を單なる微候より診斷し得ることは、首肯に價する所である。細菌の發見せられざる場合に於ても、一定病狀を呈する時、其の經過を豫斷することあるはよく經驗せられる所である。彼に於いては經濟社會は自然生物と原理的に同一のものとして取扱はれる。景氣觀測は「景氣診斷」である。「動物的或は社會的目的統一體を把持しやうとする最初の企ては常に微候論たらざるを得ない。」景氣科學的の微候論の課題は諸變動様相の特殊性を可能なる限り完全に把持することである。(註四) 一個の有機體たる經濟はそれが有する内在的法則に従つて一定の外的又は内的刺戟に對しては、一定の微候を呈する。この微候の定型は其の刺戟即ち景氣變動の原因の確知せられざる場合に於ても變動様相の觀測と其の發展に對する豫測を可能ならしめる。これがワグマンの立場である。

而して、斯様な立場は多少とも統計的方面から景氣觀測に近付くことを主眼する多くの研究者によつて、原則的に承認せられる立場であると思はれる。而して、

景氣微候定型——景氣觀測

に現される觀測の段階は一見單純にして機械的な或は技術的な方法を以つてするもので、景氣理論を全然排除せるかに見える。所謂、機械的觀測を以つて呼ばはれてゐる。然し、このことは勿論嚴格なる意味に於ては當てはまらない。何となれば此種の觀測は定型を基抵とはしてゐるけれども、然も、觀測の結果を得るが爲めには、觀測時に於ける特殊要素の作用を十分に考慮することを常とするからである。換言すれば、景氣循環の獨立性と、特殊性を認めることなしには觀測は行はれ難いからである。それにも拘らず、判斷の主要なる根據が、定型に置かれてゐる限りに於いてこれを機械的觀測と呼び得るであらう。扱私はこの機械的觀測を批判的に考察して見ることにする。景氣定型は普通には、財界循環構圖とか、景氣範式とか、景氣の進行とか正常循環圖表とかに、纏め上げられてゐるが、それ等は孰れも經驗的方法によつて構成せられてゐると見ることが出来る。即ち總ての或は主要なる變動要素の各景氣段階に於けるに典型的様相、他の變動要素との相關々係の典型的型が統計的立場からして規定せられ整序せられてゐる。而して、その整序原則は、單純なる經驗的方法の上に立つてゐるのであつて、變動理論的立場から導かれてはゐない。これがその一般の特徴である。扱て斯様な定型を基とし、現實の資料をこれに充當して觀測及豫測を行ふとすることは、一見極めて自然である。然しそれが、自然であると考へられるのは、かゝる行き方は、天文の觀測や疾病の診斷に於けると同様な類推に立脚してゐると考へる限りに於てである。疾病の微候型は無數の經驗を基礎として構成せられてゐるが故に、其の現實への適合性は確實であり、従つて豫測も亦妥當である。

る。これに引かへて、景氣の循環的變動に對する人類の經驗は未だ決して豊富なものではない。且つ又、經濟社會が不斷に未經験な領域へと發展すること換言すれば、不斷に其の構造を變化し、其のもとに於いては景氣變動の微候も亦變動するし、反對に、景氣變動そのものが構造へ影響を及ぼすと(註五)考へらるゝことは、かゝる景氣定型の價値が觀測の基抵として十分なるものでないことを認めざるを得ない。尤もワイゲマンに於いては微候型は發展的立場から構成せられ、最近のものは、一九二五年—二九年に於けるそれを構成し、觀測の基抵としてゐることは、他の研究所のそれに比して頗る異色のあるものとしなければならぬ。斯かる方法からすると、一面に於いて最近に於ける定型或は構造的變化に照應する定型を得ることは出来るけれども、これが現實を判斷する基底たる典型的景氣型となり得るかは疑問ではなからうか。一の特定の景氣循環に現はれたる様相は特殊的要素に影響せられてゐることを認めなければならぬからである。されば、景氣定型から直接に觀測を行ふか或はこれを唯一の智識としてこの上に實現の觀察を行ふとする所謂機械的方法は、結局に於いて、妥當なる結論が導かれ行ないやうに考へられる。勿論景氣定型を觀測或は豫定に直接に關聯せしめて見る限り斯様に考へられるけれども、これを觀測に對する參考資料として考證する際には、其の意味は決して少なるものではない。後に述べるやうに、私は觀測や豫測は、變動理論に導かれた批判的な調査であり、推論でなければならぬと主張するものではあるが、其の變動要素の運動を我々は純粹理論的に考察することはもとより不可能ではないけれども、それが他の要素との關聯の様相、後れ先走り等の状態に就いてこれを確定することは頗る困難とする所であり、却つて、微候論を通して初めて、證明せられることあるは稀ではないのである。故に景氣定型は、それ自體直接に觀測や豫測に對して影響する處はないとしても、變動理論を通して、影響し來る所あるは疑ひ得ないのである。故に前述したやうな(景氣定型——景氣觀測)に代つ

て、(景氣定型——變動理論——景氣觀測)の方法が、とらるべきではなからうかと考へる。以上に於いて定型論の意義を考察したからして、我々は次に、バロメーター組織に就いて若干の注意を拂ふ。

バロメーターは前述したやうに、代表的な景氣數列の結合に外ならぬ。而して、其の表現は圖表に據るものである。景氣バロメーターはかゝる圖表から景氣を觀測し豫測し得るとの考へより生じたものである。従つて、單に經濟狀態の指示或は經濟的運動の配置の側定としての意義よりは、寧ろより多く將來の變動の指示に置かれてゐる。而して從來のバロメーター組織に就ては技術的に二種のもの考へることが出来る。一は主要變動要素の綜合による單一バロメーターであり、他は、多數線を併列せしめる複合バロメーターである。ワーゲマンは此種のバロメーター構造を史的發展を辿つて主として技術的見地から評論してゐる。彼によれば、一般指數構成中に強く動いてゐる單一要求は、經濟狀態の變化を測定する單一指標を發見せんとするにある。而も初期のそれ即ち、Neumann-Spallart, Julin, Mortara 等に於いては、これを綜合指數に需めやうとしてゐる。又 Babson 指數は、紐育以外の銀行決済趨勢線を正常線とし、人口、價值、物價系列を組合せた一般指數を構成して、これを前記の趨勢線と關係せしめて物理學上の反動の原則を利用して豫測上の意味を抽出しやふとするものである。而して、ワーゲマンによれば、前者に見るが如き綜合指數構成は、其の系列の選擇及組合せの方法は全く確信あるものではなく、時としては一般に問題とせられる凡ゆる系列を完全に綜合するならば、諸系列間に於ける繼起上の時差を綜合こととなり、何等の變動も現はれないだらうと推測せられる。(註七)又バブソンのそれは趨勢線が眞の正常線に相異ないと證明することは不可能であるし又、其の趨勢は將來に亘つて描き出し難いことは明である。(註七)蓋し、トレンド曲線は景氣といふ遊星曲線の動搖の中心となす所の現實の黃道を意味するものではないからである。(註八)以上のやうなワーゲマンの技術的批

評に加へて、我々は更に、變動理論との關聯からして次の様に考へることが出来ると思ふ。即ち、單一指數の構成からしてバロメーターとしての意義を發揮せしむる爲めの條件は、理論的には飽くまでもかゝる指數が變動原因を表明するものであるか、乃至は變動原因たる要素を十分代表するかでなくてはならぬ。然し理論的に見て變動の原因は衝動原因や物的加速度的原因や心理的原因等が混淆してゐるのであつて、これを綜合單一指數に組合せることは到底不可能のやうに思はれる。故に綜合單一指數を以つてするバロメーターの意義は全くないと謂へる。更に又、バブソンの仕方は、景氣變動を力學の原則を以つて表明しやうとする試みではあるが、それ自體甚しい無理を包含するやうである。尠くとも、經濟活動の、一面に於ける膨脹と他面に於ける縮少する上に力學的關係の存することは説明し得ないと思はれる。バブソンは其の著 Business Barometer に於いて、ニートンの equal reaction の法則は單に自然現象のみならず、社會經濟現象にも適用し得ることを述べて次のやうに説明してゐる。「等反作用の法則が經濟上又は商業上の事實にも應用し得られることは物理及び心理の二大科學の實例に依りて明である。如何となれば、實業界の情況は一般の物理的及び心理的二因子を其の有効素因とするが故である。例へば雨量は商業上の循環に影響を及ぼす重要な物理的因子である。と云ふのは雨量に農作に影響し、農作は常に經濟界の趨勢を決定する有力なる因子であるからである。……然し、雨量の影響よりも更に重大な關係のあるものは心理的因子である。經濟界の繁昌活潑が人の心情に及ぼす影響は人のよく知る所であつて、沈睡又は逆運の時期も之と同一である。」(註九)

惟ふに斯様な説明はシェブオンスの黒點説やビグーの心理説の粗朴なる表現を持ち來たものではあることは争はれぬ。前者による説明が今日殆んど無視せられてゐる所あるはいふを待たぬ。又後者に據る説明は勿論短期現象

の説明に於いて重要視せられてはゐるけれども、かゝる經濟外的原因を以つて貫徹し得ない多くの他の一層重要な要因として財貨的貨幣的方面を顧みることが餘儀なくせられてゐるのである。最近に於ける長期波動の研究の結果は、下降期に於いては、微弱なる景氣上昇に續いて永續的深刻なる景氣下降が一般に承認せられやうとしてゐるのであつて、其の間單純に動反動の等反作用の法則を以つてしては説明し得ないものを包含してゐるのである。

斯様に綜合系列による一般バロメーターが、其の本來の目的の一半である豫測上の意義に就いて、甚しい疑義を生じ、且つ、實際上の要求に對しても十分の效用を發揮し得なくなつたのに對して純然たる客觀的機械的立場から多數曲線によるバロメーター構成を通して、豫測上の問題に近附いたものは、ハーヴァードの三市場曲線である。この外多線バロメーターとしては、ワグマンによれば、De Foville, Richard Sorer, Brookmire, economique Service に於ける各バロメーター組織が擧げられてゐる。然し、其の影響力の最も大であり、且つ、經驗的方法として完成せられたものは、ハーヴァードのそれに外ならぬ。(註一〇)

三市場曲線バロメーターに對する批評殊に技術的方面からの批評は多々あるが觀測上の効果を主眼としての批評は大體次の諸點に纏め上得られやう。

第一に三市場曲線が純然たる經驗的方法によつて經濟運動の總體を一般バロメーターとして綜合してゐることである。三曲線の構成を見るに、數理統計によつて、長期及季節變動を除去したる景氣變動中物價變動に比して等しい遅れ及進みを有するものが各グループに集合せられて構成せられてゐる。斯様な經驗的方法に基づく代表原理による選擇は、觀測の立場からして、國民經濟全體の代表型として決して妥當なものではない。觀測上からすれば、經濟の全面的波動即ち、生産流通兩局面の波動現象が適當に代表せられることは最も肝要である。殊に其の中生産

局面に於ける變動及變動可能性の測定は、流通局面のそれを惹起せしむる最も重大なる一源泉たることは疑ひ得ぬと思ふ。されば三市場曲線はそれ自體經濟的運動の一横斷面を表明するものではあるが、運動全體の容相を代表的に表明するものではない。ワグマンの述べる如く、「ハーバード・バロメーターは多種のバロメーターの中の一として其の地位を占むる時にのみ存在権を勝ち得るに過ぎない。」(註一一)

第二の點は、相關々係の永續性に對する過信である。これは多數曲線バロメーター一般に對して生じ來る最も重要な問題である。ハーバード曲線に於いては三市場曲線間に一定の繼起關係が発見せられ、それによつて無意識的にはあるが確率理論が採用せられて豫測が行はれてゐる。曲線間の繼起關係は豫測上決して輕視せらるべきものではない。變動理論の立場から一定の比例關係が設定せられ、而も、事實上の變動がこれを證する如き正の相關係數を示せる場合、其の價値は十分に認めらるべきである。然るに流通局面に於ける三市場間の關係は、必ずしも、理論通りの關聯を持つてはゐない。

ハーバードの三曲線は、投機(ニューヨーク市中銀行の「銀行貸」及工業株)、商況(ニューヨーク以外の「銀行貸付」及卸賣物價指數金融(商品手形の割引歩合)であるが、この三市場間に於ける理論的關聯は、恐慌後に於ける金融の緩漫によつて、資金は、證券市場に流れ、證券市場の活潑は、商品市場の活況従つて、資金のこの方面への流通を促し、更に、恐慌に際しては、商品、證券兩市場の資金は金融市場に引揚げられて、金融市場は緩漫となるといふにある。

この事はワグマン、ヴィクセル、カッセルによつて指摘せられてゐるやうに、(註一二)特殊景氣變動に於いては、其の間の依存關係は全くか様に典型的には行はれぬ。然る以上、特殊景氣變動に就いての觀測や豫測に對して、そ

の相關々係を機械的に延長して考察することは不合理でなければならぬ。

以上述べたる如く、総合的代表的曲線の撰擇により、機械的方法を以つて豫測を行ふ爲め的手段としたバロメーターは、理論的に諸矛盾を包含してゐるのであつて、それが爲めに、其の現實的豫測の結果は著しく不當なものとなつたのである。歐洲大戰後に於けるハーヴァード式に則る諸研究所の成果が孰れも思はしいものでなかつたことは敢て精しく述べる必要はないであらう。之が爲めにバロメーターに對する觀念も亦斯様な代表型の撰擇と其の機械的續釋たるものから、一層多面的敘述的歸納的方面へと動きつつあることを看過し難い。換言すれば、景氣觀測及豫想上の資料の集成が、Barometer よりは寧ろ Thermometer へと移動してゐる。我々はかかる轉向の最も代表的なものとしてワグマンを中心とする伯林統計研究所の方法に當面するのである。

伯林統計研究所のバロメーター組織は、其の多面性に於いてハーバードのそれを遙に凌駕してゐることは第一に注意せらるべきである。それは、「全經濟有機體を多面的に亘つて限なく照し出すバロメーター體系のみが初めてよく經濟狀態を解明することが出来る。」とする目的のもとに組立られてゐるのであつて、而も、其の組成に當つては、二の統制原理を基礎としてゐる。一は靜態より得られた觀念による類別であり、二は變動關係による類別である。前者は各種の數列が財貨側の要素をなすものなるか又は、貨幣側の要素をなすものであるかそれか又兩者に關係してゐるものであるかに従つて靜態は類別を教へる。後者は、各種系列間の關係は、均等變動(Gleichbewegung)「束線」(Strahlenbündel)追隨變動(Folgebewegung)背反變動(Gegenbewegung)の孰れかに類別せられる。この變動關係による類別は技術的な問題或は視察による問題とし、大して重要なものではないが、前者殊に靜態との關連は如何なるものであるか。こゝにいふ靜態は結局する所財及貨幣の側に於ける正常なる循環の狀態であつて、財貨

側に於いて見るならば、消費と生産、輸出と輸入を主要要因とする一種の貸借對照表的關聯を示すものであり、貨幣に於いても同様に、支拂の正常的循環であつて、それは所得の潮流循環と、貨幣資本の運動の二大分野より構成せられてゐる。(註一三)

要するに、靜態の觀念は、財・貨幣流通に於ける正常なる循環機構であつて、それ以上ではない。即ちこゝに特に注意すべきは、それは單に系列分類上の觀念的出發をなしてゐるのであつて、バロメーター構成上の理論的基礎をなしてゐるものではない。變動理論の立場から、其の構成が基礎付られてゐるのではなくして、單に、全經濟の有機體の諸斷面の綜括的考察の爲めにする便宜的方法に外ならぬ。伯林統計所の觀測の方法は單にバロメーターのみに依存するものではない。かゝるバロメーター構成よりして、一の典型を抽象して、これを以つて現實の運動を觀測する基礎としてゐるのである。然しながらバロメーターが其の中心的機能を果たしてゐることは看過し得ない所であるとともに、其の構成が、ハーバードのそれに比して多面性を有する點に於いて特殊の意義を見出すとしても、全體の方法は依然として統計的なるを免れないのは、前述の點に依存してゐるものである。

尙ワグマンは、單なる相關々係の機械的演繹を以つて満足せず諸變動間の相關々係に迄到達し、これにより、觀測原理を得やうとしてゐるが(入門六一六八頁)未だそれは成功してゐない。尙この點に就いては、Heinrich, W. Grundlagen einer universalistischen Krisentheorie P. 155. 豊崎稔景「法政豫氣研究」二一九頁參照

要するにワグマンに於いてもハーバード法の持つ根本的缺陷は尠くともバロメーターに關する限り解決せられてはをらぬ。否更に後者に於いては、三市場の關係に理論的關聯が設定せられ得る可能性を持つてゐるに反し、ワグマンのそれは、單なる均衡觀念よりの抽出による財貨群及貨幣群の整序が行はれてゐるに過ぎないのであつて、

随つて、理論的立場から考へられる諸變動要素間の函數關係が設定せられるなればそれは必ずしも、既設のパロメータ、體系と一致するものではなく、却つて、パロメータ體系の再組織が強要せられはしないかと考へられる。以上述べた様に、景氣定型にしても、パロメータにしても、且つ又、それが、綜合的代表型のもでも、或は又、多面的なものであつても、凡そ、所謂景氣微候論を以つて、觀測の基礎とすることは、尠くとも今まで此方面に見られた發展のみからすると疑はしい様に思はれる。其の一般に共通する根本的理由は、斯様な典型的な微候型には、それから、現實の特殊的景氣變動を説明し得る契機が缺けてゐる點に存する。如何程變動諸要素間に於ける相關係が精密に計算せられたにしても、それから直接に、本質的に重要な現在の特殊情勢を理解し得るとなす理由は見出せぬ。此の場合最も重要なは、かゝる相關係の持つ必然的な關係を明かにすることに外ならぬ。かく微候論と、觀察との中間に、變動理論を介在せしめて、其の理論的立場から、現在の資料の整理によつて、一定の結論に到達することが最も合理的科學的方法であると謂はねばならぬ。かゝる仕方は、或は批評的觀測法と呼び得るかも知れぬ。蓋し、それは微候論より構成せられたる一定の理論を基礎とし、其の上に現實を綜合統一して判斷するが故に、歸納と演繹とは、適宜に調和せられてゐるが故である。

- 註一 E. Wagemann, Einführung in die Konjunkturlehre. 萩野・望月兩譯六〇—六一頁
- 註二 高田博士「經濟學新講」第四卷「變動の理論」二二四—二三〇頁
- 註三 E. Wagemann, Ibid. 一五六頁
- 註四 Mitchell, Business Cycles. P. 312
- 註四 E. Wagemann, Ibid. 六三頁

- 註五 豊崎稔著「景氣觀測法研究」二二八頁
- 註六 E. Wagemann, Konjunkturlehre. 小島昌太郎譯、一五六頁
- 註七 Ibid. 一六八頁
- 註八 Ibid. 七二頁
- 註九 Babson: Business Barometer. 日向氏譯、六七—八一頁
- 註一〇 E. Wagemann. Ibid. 一六〇—一六二頁
- 註一一 Ibid. 一四〇—一四二頁
- 註一二 Ibid. 一六六頁
- 註一三 循環樞圖の詳細に就ては入門、邦譯、三八—四二頁参照。Schuler, W. C.: Economic cycles and crises. p. 78-123

三

以上二章の結論は以下の如きものであつた。景氣觀測に於いて、景氣理論そのものから直接にも、現實態様の觀測は行はれ得ぬ。更に又、過去に於ける單純なる變動諸要素間の相關係から機械的にも導かざるべきではないことである。即ち景氣理論や微候論或は定型論はそれ自體として觀測上重要な意義を有することは争ひ得ない所であるが、それ等が觀測に對して寄與するには、特殊の原理を據つて組織せられる觀測機構を通してでなければならぬ。換言するならば、景氣現勢及び其の發展性の妥當なる認識を得るが爲めには、現實諸經濟要素の理論的分析並に、それと發展理論との結合を通じてのみ合理化し得るのであつて、これが爲めには、景氣變動理論や定型論と對立する觀測原理を要求するのである。而して、いふ所の觀測原理は、現實變動諸要素間に於ける因果關係乃至はワグマンの求めやうとしてゐる如き函數關係ではない。それ等は孰れも變動理論の研究に要せらるべきである。更

に又變動諸要素間に於ける相関々係でもない。それは徴候論の問題であるが故である。即ち需むる原理は、現實諸系列の齊整原理に外ならぬ。乍然、それは、單に量、價、價量の如き系列そのもの、統計的性質に據る整序ではなく、或は又、財及貨幣の均衡的關係より直接に抽出せらるべきそれではない。かゝる齊整原理は發展理論及び變動理論を基柢としての、現實諸要素の分析及び其の綜合的考察に關する原理に外ならぬ。前述のやうに、斯様な發展理論及び景氣理論はそれが動態經濟上の問題を取扱つてゐるにせよ、決してこれに謂ふ現實に直接に妥當するものではなく、飽くまで純粹理論的構成であり、その限りに於いて究竟的概念に外ならぬ。されば、我々はこれをとつて現實的變動を分析する基調とするとしても、それは、決して、其の理論的正しさの證明としての價値に就いては考へる必要はない。我々は全經濟系列を因果的關係に於いて秩序付けることを望むからして、かゝる要求を實現する爲めの指導として、變動理論に依據しやうとするのである。而して、景氣理論は謂ふ迄もなく、變動の原因關係の研究を主要なる目的とはしてゐるけれども、其の完全なる構成は變動要素全般に對して、因果關係を明にすることに存する。然る以上、これを現實に適合するに際しては、當然、全經濟系列を一定の序列に結び付けることゝならう。然しながら、茲に注意すべき、變動理論の構成は勿論全經濟的要素を一定の理論的關係に於いて結び付けるけれども、然も、現實の事象の整序關係は必ずしもかゝる理論的關係と同一のものではないことである。變動理論の要求する所は一定の原因的事象が發展して典型的循環的變動を構成する全經濟系列の上に如何なる作用を及ぼすかの研究が主要問題であるに對して、觀測上の整序原理は、現實の諸經濟要素を分析して、現實狀態が理論的立場からして、如何なる發展或は景氣段階にあるか、を、正確に明瞭に把持することを主要問題としてゐる。故に、かゝる齊整原理は、組織方法或は構造方法上の原理であつて、前者の純然たる理論的性質に對して技術的性質のもので

あることは争はれぬ。

この點に就いて我々は次の問題に當面することゝなる。即ち何等かの變動理論に指導せられて現實變動要素を整序する方法は、果して、かゝる變動理論から離れて、量、價、價量の如き統計的性質によつて、全系列を分類しこれによつて、組織する單純なる統計的方法と比較して勝る所があらうか。

ワグマンは此問題を次の様に見てゐる。「景氣循環を種々の局面に分類しやうと思ふならば、できるだけ一定の景氣理論、從つて又經濟變動の一定の目じるしに拘束せられない方がよい。分類を行ふには出来るだけ自由自在に、經濟の財貨側の事象も貨幣側の事象も、また資本變動の事實も所得變化、生産、在庫、消費及び外國貿易などの事實も、そのなかに取り入れ得るやうにしなければならない。」(註三) 即ち彼に於ては、理論的立場からの分析よりは統計的分析を尊重してゐることは疑ひ得ない所である。勿論これに對して彼は如何なる理由をも與へてはゐない。併しこの點が彼の後の研究過程即ちパロメーター構成への必然的立發點をなしてゐることは争はれぬ。洵にこの點は機械的統計的觀測の立場をとるか乃至は理論的演繹的立場をとるかの分岐點をなしてゐると考へることが出来る。而して前者は次の點に就いて批評せられる餘地があるやうに思はれる。即ち、斯様な方法は、多數の經濟的要素を集合するが故にそれはワグマンの希望する如き縦斷的横斷的(註三)資料集成の目的に合致するやうに考へられるけれども、凡そ、縦斷的資料集成は、各系列が、五に因果的に關聯を以つて組織せしめられたるの意味に外ならぬであらう。何となれば、各系列は、統計的性質によつて列序せられる限りでは、それは、系列間に時間的差異が存する點のみが現はれて、全く平面繼起關係による組織となるであらうからである。又斯様な方法は、一定の徴候論或は定型論を前提としてのみ初めて景氣局面の決定に意義を持つことは謂ふを待たぬ所である。然る限り、定型を

のものが、安定性を持ち得ないやうな經濟社會の變動期に際しては、其の效果は著しく減殺せられざるを得ない。扱て、次に一言注意したいのは、變動理論を基底としての資料集成は既に過去に於いて經驗せられた所があつたことである。而して、其の企ては失敗に歸して仕舞つたものではあるがこの際一應返つて見ることは無意義なことではないと思はれる。それは、スピートホフの景氣變動論を基底として資料集成を行ひ、これによつて構成せられたるパロメーターによつて豫測を行ふとしたジンガールの試みはそれである。

スピートホフの景氣論殊に景氣の各段階の説明は次のやうに要約せられ得る。先づ第一に好景氣より不景氣への轉遷を見やう。彼は好景氣が一度發生するやこれを持續し發展せしむる力はそれ自體の中より生じ來るとなす。彼によると、好景氣は中間消費財の要素の増大として現はれる。彼は財を分つて中間消費財と収益財と消費財となし、其の中、前二者は營利資本によつて購入せられる。扱景氣の好轉によつて中間消費財の需要は増大し、其の價格を騰貴せしむる。それによつて當該産業の利益は増大し、従つて勞働力と物的生産力の充用は増大し供給額は愈々増大する。それは他面に於て、これを購入する營利資本の形成を高める。この事は特に勞資間の分配の不均衡によつて促進せられる。然らば其の中間生産物への投資の増大、其の供給量の増大が圓滿に進行するかといふに、それは必然に崩壞するに至る。其の理由は一方に於いて營利資本の缺乏であり他方に於ては中間消費財の生産過剰である。前者は中間消費財賃銀の増大、利潤減少による營利資本の低下である。後者はこれに比すれば更に重要である。然らば生産過剰は如何にして生ずるか。蓋し中間消費財の増大は中間生産の爲めの設備の擴張を要することとなり、それは次で中間消費財の需要を増大することとなる。然し、其の生産は長期を要するが故に、供給の不足は生産設備の増設を要せしめる。斯くして、それは財貨の世界内部に於ける均衡を破る。即ち中間消費財の過剰は勞働力及生活資料の缺乏なのである。然るに資本主義經濟内部に於ては物對物の關係に於いて不均衡は現はれず、常に物對貨幣の關係に於いて現はれる。されば中間消費財の過剰は、これを購入すべき營利資本の缺乏たるの表現をとる。

不景氣の局面に於ては、以上とは反對の事情が起り、其の結果生産設備の休止勞働力の過剰、營利資本の蓄積が生ずる。これ等の要素は景氣復活への一部の條件である。眞の景氣復活の原因は、新市場の獲得や技術的發展を利用する大膽なる企業精神の勃興の中に存する。(註三)

以上のスピートホフの景氣理論に立脚してジンガールは景氣徴候の本體となるものは中間消費財の生産と營利資本の形成にありとし、前者に對しては鐵及鋼の供給高を以つて、後者に對しては株式發行高を以つて代表せしめた。而してこの二つの系列の變動を通じて景氣豫測を行ふとするのである。このパロメーター組織に於いて資本形態が鐵供給高よりより強く増大すると好景氣の刺戟物の實現の前提條件が發生し、逆の關係が顯はれると好景氣の進展を妨害する事態が生ずるのである。(註四) ヴィルトシャフトディンストに掲げられたる同パロメーターは一九二五年位迄は容認せられ得る程の關聯を示してはゐるけれども、二七年以降は其の關聯は明白に顯はれず、従つて、全く豫測に失敗するに至つてゐる。

これに就いては二様の批評が下されてゐる。一は、徴候型的選擇及其の組織は何等間然する所なきも、スピートホフの理論の價値喪失が其の主要原因なりとする見解に基くものである。(註四) 他のもものは、ワイゲマンの唱ふる所であるが、スピートホフの變動理論は別として、かゝる企はパロメーター組織そのもの基本原理を無視してゐるが故に外ならぬ。即ち、單一なるは綜合パロメーターが有する技術上の缺陷を暴露するに至つたに外ならぬといふ。(註五) 孰れの批評も決して無理なものではない。乍然、私は此等の批評に加へて更に今一つ重要な批評を下し得る餘地があると考へる。それは、變動理論が暗示する徴候量は、理論と同様に抽象的な徴候量であつて、現實の變動を理解し、豫測する徴候量は、かゝる抽象的徴候量を以つて置き換へ得ないことである。その自要なる理由は、現實

の景氣變動は、典型的變動型に對して、それぞれ獨自性或は特異性を持つてゐることに據るといはねばならぬ。勿論、變動理論が現實の變動に妥當する力が強くなればなるに従つて、かゝる抽象的徵候量が現實的なものに轉化して來る力は強くなるであらう。さりながら、變動理論が、純然たる理論的構成なる限り、其の現實を説明するに際しては、現實的變動諸要素の商量による特殊要因の作用を明にすることなくしては、不可能であらう。さすれば、公式的に抽象的な徵候量を具體的な徵候量へと移動せしむることは、頗る危険であるといはねばならぬ。

以上のことからして、私は、次のことを結論し得ると考へる。即ち、變動理論に立脚しての齊整原理は、決して、變動理論の暗示する抽象理論的徵候量の發見及其の配列のみを内容とするものではないことである。

以上に於いて、観測上の資料集成に關する齊整原理の性質を明にした。次に、然らば、かゝる齊整原理は、如何なる内容を有するものかを考察することが必要となる。

我々は先づかゝる整序原理が、包含する二の大なる分野として構造と變動とを擧げることが出來やう。この區別の關する限りではワグマンが多量の暗示を與へてゐることはいふを待たぬ所である。從來の統計的機械的觀測法にせよ或は理論的觀測にせよ其の缺陷を暴露した一の大なる原因は確にこの對立を輕視したことに存する。換言すれば、それ等は主として變動や機能のみを偏重して、組織の變化や其の特質に對して充分の考慮を拂つてゐなかつたのである。其のことが總て、理論の公式化や徵候の定型化を偏重する傾向を齎したのである。洵に、組織の變動、構成の變化は、除々として行はれ、所謂長期的傾向に所屬すべきものであつて、景氣變動と對比して鋭しい對照をなしてゐることは明である。然るが故に統計家は、この傾向を排除して景氣系列のみを問題にしやうとする。然し、ワグマンが正しく指摘してゐるやうに、構造の變動と景氣變動様相の間には、不可離の關係が存在してゐるのである。

あつて、景氣特性は特殊經濟制度によつて規制せられる。各個經濟領域の經濟構造の基礎に種々の相異のあることは——これは生産要素が異なる割合で存在することによつて生ずる——如何なる場合に於ても、第一に經濟活動の特性第二に經濟運動の特性を著しく規定するものである。註六而してワグマンに於いて構造は「領域の廣狹、及び發展期の遲速如何に従つて全く多種多様である所の自然的地理的、民族的、心理的、政治的、法律的、技術的な天賦(Gegebenheiten)或は事實(Daten)から生ずるものである。」註七この構造によつて一國民經濟に與へられたる經濟的諸力の關聯及び配置を以つて經濟組織となしてゐる。而して經濟組織はこれを組織形態——自由欲望經濟、自由收益經濟、統制收益經濟、統制欲望經濟——と集約度段階とに分類せられ、兩者の組合を通して國民經濟の現實型が構成せられてゐる。

高田博士は、經濟的構造を次の様に説明してゐる。即ち「經濟的構造は、それ自體經濟的であるにせよ、又ないにせよ、經濟的なものを決定するところの組織である。經濟を決定する條件といふ意味に於て經濟外的である條件……の與へられたる綜合に外ならぬ。此經濟的構造の變化に従つて經濟的數量は變動する。即ち變動要素は構造要素の變動につれて變動する。變動要素の變動は構造要素の變動、即ち構造變動に對して機能變動と稱せられてゐる……構造要素として數へられてゐるものの中には第一地理、氣象に關する物理的條件、第二、人種、年齢構成、性的構成、人口等に關する生物學的條件、第三法律的政治的組織習慣等に關する社會的條件、第四、宗教、學問、道德、藝術に關する文化的條件、第五、技術生産組織に關する生産方法上の條件等がある。なほ一たび變動要素として成立したる所の經濟的數量が持續的に他の經濟的數量を決定する役目を營むときには、一種の構造要素として數へられ得る。その最も代表的なるものは、資本數量及固定資本としての種々な設備である。」註八

扱ワグマンに於ける構造の研究は各國民經濟の分類を行ふことを第一義としてゐるのであつて、これによつて、

國際的景氣變動と各國に於ける景氣變動の特殊性とを明ならしめやうとする理論的研究の主要なる問題をなしてゐる。而して、景氣觀測或は彼の好んでいふ所の景氣診斷とそれとの關係は如何なるものか、彼は次の様に説明してゐる。只包括的な當該國民經濟の現實型に妥當せる諸系列組合の組織によつてのみ嚴密に劃された限界内に於いて確實なる景氣變動の診斷が可能となる。かゝる組織を構成する事に當つて經濟運動は相互に依存するものであり相互に函數關係に立つものであるといふ考に私は立脚する(註九)。要するに、各國民經濟の現實型に妥當せる經濟變動間の函數關係——相互依存性の組織——を把持し、これに基いて變動要素を構成することによつて觀測を行ふところにある。斯様な變動要素の構成として實際に彼の示してゐる所ものは、高度資本主義國にして而も集約度段階の高い諸國に就いて収益、生産販賣、パロメーターを構成してゐるのである。而して、この構成に用ひられてゐる資料の集成を見るに各國によつてそれぞれ多少の變化を示してはゐるけれども、それが構造上の變化とどの程度迄關聯してゐるかは明確に示されてゐない。要するに彼に於いては構造變動の景氣變動に對する影響を重要視してゐることは争はれないけれども、景氣診斷に於ける實際上の意義は、理論的考察上の一條件となしてゐるに過ぎないのであつて、觀測資料集成上に於いては、さして重要な役割を持つてゐない。觀測の技術的準備は全く變動部門に於けるパロメーター體系の構成にかゝつてゐる。景氣診斷を實際に行ふことは所謂經濟パロメーターを——經濟變動の諸系列特に景氣變動の諸系列の一定の組合せを意味する——通俗的な慣習に従つて使用することである。(註一〇)この點に就ては、伯林統計研究所の立場は、他の景氣研究所、殊に米國のそれ及び、後者と連絡をとつて發展し來つた歐洲諸國に於ける景氣研究所のそれと根本的に異なる所はない。然して、かゝる諸景氣研究所の觀測成績が十分の効果を擧げ得ないのはパロメーター構成それ自體の理論的乃至技術的缺陷に基因する所はあるとして、それにも

増して重大なる難點と目せられるのは結局、觀測體系そのものの中に、構造的變動をとり入れ、これをパロメーター組織と對立せしめてゐない點に存するのではなからうか。蓋し、資本主義社會の高度の發展は構造的變動に對する社會的諸條件を殊更に強化し來つたことは争はれぬ所であり、且、それ等の條件中殊に政治に於ける諸變動が經濟に對して永久的な或は持續的な變動を招來する事情は、深刻であるのみではなく、又頗る急速に出來してゐる。政治上の諸政策が國際販路分割に對して及ぼす影響の甚大なることは謂ふ迄もなく、其の他の金融政策產業諸政策が、國內的或は國際的の產業活動に對して新たな方向を築き上げてゐることは、可成顯著な所である。更に又、統制活動の強弱、改廢が景氣變動に對して重要な影響を與へることは勿論看過し得ないであらう。要するに構成變動を漸次的な微動的な漸進形體として、直接景氣變動と對立せしめなかつた從來の觀測上の立場は、この點に就いて重大なる變革を蒙るべきであらう。扱我々が觀測の資料集成上の一段階として商量する構造は、一面に於いて組織であるともにも他面に於いて政策でなければならぬ。而してそれ等は孰れも資本主義社會の發展理論の上に其の基礎を置くことを要する。然らざる限り、組織及び政策の變動の方嚮を規定し得ないが故である。組織に於いて我々は、一般資本及特殊資本の資本主義的發展を表明する度合を測定すると同時に其の發展の傾向を把持しやうとする。一般資本即ち社會總資本に就いては、其の有機的構成金融資本化、獨占の程度、資本分布の特殊性等の一般的問題に懸らしむるとともに、特殊資本に於いては、各種部門に於ける資本即ち礦・工・商・農其の他の資本に表はれたる資本主義的發展及其の傾向を確保しやうとするのである。他面に於いて、政策は、世界經濟の立場から高度資本主義國に於ける政治的經濟的政策の一般的狀態と其の發展の傾向を把握するとともに、國內に於ける政治經濟諸局面に現はれてゐる諸政策を分析し、其の動向を察知するにある。即ち國民的には、財政、金融、産業貿易に對する國家的政策と、

各主要産業の資本家間に於ける生産流通組織に關する諸政策を簡明にすること並に、かかる政策の一般的發展の傾向を把持することが必要である。

要するに構造に於いて研究せられる所は、生産諸要素の組織及其の集約度段階の問題のみではなく、政策を通じての發展の傾向を明確ならしめやうとするにある。かかる立場から研究せられた構造と、次に述べやうとする現實の景氣情勢の分析とを総合的に考察することによつてのみ妥當なる観測を行ひ得ると考へられるのである。變動局面に於いて我々が研究しやうとする所は現在の景氣が如何なる形體のものか、換言すれば、現在は景氣發展の如何なる點に存するかが主要な問題をなして來る。勿論、景氣の現實形態を分析することからして、其の將來の發展性に就いての暗示を得ることは當然であるけれども、こゝに於ける問題は飽くまで、現實經濟狀態の分析である。

ワグマンは前述したやうに三箇の系列を以つて、現景氣段階を指示せしめやうとしてゐる。曰く、營利、生産、販賣パロメーターがこれである。又彼のいふ所によれば、ハーヴァートの三曲線は營利パロメーターに外ならぬとせられてゐる。孰れにせよ、この際とられてゐる分析原理は、後者に於いては純然たる數學的經驗であり、前者に於ける經濟均衡に立脚する全景氣系列の包括であることは見逃し得ない所である。この點に就いては、既述の如く、景氣の横斷的分析であつて、ワグマン自體の希望する如き縱斷的分析ではない。縱斷的分析はあくまでも、景氣現象の中心をとらへて、全景氣系列がこの中心系列に對する因果的關係を辿つて、これを整序するものでなくてはならぬ。我々は、かかる立場が、景氣變動理論と密接な交渉を有するに至ることを看過し得ないのである。扱て、景氣現象として最も一般的な或は最も中心的な現象は、物價に求められるやうである。現今に於いては、物價は微

候論上よりすれば、景氣變動の先馳形態をなすものではなくして、これよりは、稍遅れるもの、更に又、從來の物價變動が景氣變動に占めてゐた時間的關係は稍遅れるやうになつたことが確認せられてゐる。^(註二)然しながら、微候論上に於けるかかる遅れは、必ずしもそれが景氣を表明する一般的な中心的な要素なることを妨げるものではない。乍併、これを採用するに當つて、從來の如く單に卸賣物價指數のみに依據することは、適當ではない。卸賣物價の内容諸要素に就いて分析的に考察することが必要であらう。蓋し、周知のやうに、現在の國民經濟には、統制非統制の著しい對立が見られてゐるのであつて、これが爲めに、景氣様相が各價格要素の上に可成の隔を以つて顯現するに至つたことは争ひ得ないからである。さて、價格現象を變動理論の立場から批判すると、當然に生産と消費の兩局面の分解に這り來るのである。近來盛に重用せられる生産指數は物價を批判する一系列とし意義あるものではあるが、更に進んで、其の構成要素を適宜に分解して——例へば、生産財對消費財、原料對製品或は農産物對工業品等——比較し、これを通じて、生産の均衡的發展が維持せられてゐるか否かを觀察することは一層意義の大なるものがある。生産の有利性を表明するものは、利子率の變動に需めらるべきであらう。然る以上、金融市場、資本市場の狀況は、現在の生産の狀況を批判する重要な一要因をなす。貨幣的景氣變動理論は一般に、物價騰貴すれば、貸付資本に對する需要増加し、預金の増率は相對的に低下し、従つて金利は漸騰すると見てゐる。我々は勿論この理論的關係に束縛せられる必要はない。併し乍ら、物價變動と利子率の變動との間の甚しい軒隔は、生産局面に於ける心理的作用を特に重視することを要する一因を提供して見ることが出来る。次に考慮せらるべきは消費市場である。こゝに於いては、購買力の變動が生産局面の變動と如何なる關聯を保つてゐるかを追求することが問題である。労働者の購買力の變動は、生産費數量と實質賃銀指數との比較を通じて見ることが出来るであらう。農業部門

のそれは、農産品価格と工業品価格との差を通じて、更に小賣商人階級のそれは、消費財価格と生産財価格との価格差を通じて考察せられる。かゝる購買力變動を観察する他の批判的系列として争議件数や破産件数等を顧るべきであらう。生産と購買力との關聯として我々は流通局面を考察することを要する。販賣指数はこゝに於いて最も重視せらるべきことは謂ふを待たぬ所ではあるが、更に、在庫品の消費量、貨物積載量指数等も併用せらるべきである。更に、數量及價格を通じて觀察せられたる外國貿易及び爲替關係も亦十分重要視せらるべきである。

かゝる景氣變動局面の批判的分析は未だ一の試案の域を脱してゐないかも知れぬ。それには更に資料集成上、多大の膨球が加へらるるであらう。然しながら、かゝる變動の現實體の分析と、構造即ち組織と政策を通じて得られたる發展傾向とを総合的に觀察することによつて、經濟観測を行ふとする試みは、十分の根據があることと信ずる。

四

以上を要約するに次のやうに結論せられる。景氣變動理論の理論的性質を検討するに、それは一般的均衡理論を前提とし、其の對象を、典型的變動形態に求めてゐて、純粹に理論的に構成せられてゐる。さればそれは、一般均衡と同様に、觀念的であり、究竟概念の構成である。それ故景氣観測に於いて要求せられる現實の景氣の進行と其の發展の傾向とを把持する爲めの方法は、變動理論から直接には導かれぬ。何となれば、後者は一般的、典型的理論であつて、現實への適用を問題としてゐないに反して後者は正に特殊のあり経過である現實景氣の解剖を問題してゐるが故である。もとより、變動理論は、観測する爲めの重要な理論的前提たり得るが、観測は變動理論には包含せられない別個の齊整理論を要求する。然し乍らかゝる齊整原理は其の根據を、變動理論に置くべきで、定理論や微候論に置くべきではない。蓋し、それは、観測が國民經濟の全般的進行を正確且明瞭に表明するが爲めには、經濟

數量及事實を批判的序列を以つて分析し而してこれを綜合することを必要とするが故である。而して、観測は單に變動理論によつて表される原因的要素及代表的變動局面のみを抽出し、配列するものではなく、飽くまで全面的資料集成を要求する。即ち観測の内容は、一面に於いて經濟構造の分析及其の發展の傾向であり、他面に於いて、景氣變動局面の分析である。前者は發展理論に導れて、世界經濟の立場からする經濟組織及政策の分析であり、後者は、景氣變動理論に導れて一般均衡を表明する物價の分析より始めて、これに影響する諸要素を批判的に分析しやうとするにある。されば、それは、機械的観測法に比して批判的方法とも呼ばれ得やう。

註一 E. Wagemann: Einführung. 邦譯一七〇頁。

註二 " Konjunkturlehre 邦譯一六六頁。

註三 Krisen (Handwörterbuch d. Statwiss. 4 Auf.)

註四 豊崎稔著「景氣観測法研究」一六〇頁。Singer: Kredit Kreation und Konjunktur. 參照。

註五 E. Wagemann: Ibid. 一六七頁。

註六 " 三二六頁及 Wagemann: Die Wirtschaftsverfassung der Republik Chile, München und Leip. 1923 參照。

註七 E. Wagemann: Struktur und Rhythmus der Weltwirtschaft 邦譯一八一—一九頁。

註八 高田博士「經濟原論」二六四—二六五頁。

同 「經濟學新講」第四卷「變動の理論」三七頁五五頁。

註九 E. Wagemann: Struktur. 二九四頁。

註一〇 " 二九二頁。

註一一 土方博士「我國景氣指數の測定」經濟學論集新卷第四號昭和六、七、參照。

批判的景氣観測に就ての若干の考察